

世界とつながる
教室



小学校での出前授業でカンボジアのことを伝える岡山学芸館高校の生徒と留学生

出前授業でカンボジアと
日本をつなぐ

留学生の受け入れなどを通じて、国際交流に力を入れる岡山学芸館高等学校。カンボジアの留学生と共に、地元の小学生に国際理解の出前授業を行っている。



高校生が先生になって
国際貢献

「今日はグループに分かれて、貿易ゲームをやりましょう！」
紙、はさみ、定規などが配られ、自動車やシャツ、バナナなどの形に紙を切って色を塗り、商品を作る。商品ごとに値段が決まっており、一番稼いだグループが勝ちというルールだ。
「あれ、ここには紙しかないのに、隣のグループははさみを持ってるよ」
「あっちには定規もあるみたい」
そう、実はグループによって配られる紙の量や道具の数が違う。道具が多いほど、いろいろな種類の商品を作ることができ、紙しかないグループは…。先進国と開発途上国の貿易の「格差」を実感するゲーム。岡山市立西大寺小学校の6年生の授業のひとつだ。

小学生に貿易ゲームのやり方を教える生徒。授業中のちょっとしたハプニングも大きな経験に



教だんに立っているのは、担任の先生ではない。岡山学芸館高等学校進学ドリームコースの生徒とカンボジアの留学生だ。

岡山学芸館高校では、毎年数人の留学生をカンボジアから受け入れている。そのきっかけは、毎年実施しているタイ・カンボジアへの研修旅行。訪問先の一つであるカンボジアのシエムリアップにある日本語学校との交流事業として始まった。

留学生との交流を通じて学んだことを地域にも還元したい。そう考えた武縄久美子先生が生徒たちと相談し、たどり着いたのが小学校での、出前授業だった。

そのためには、まず自分たちがきちんと、知ることが大切。青年海外協力隊経験者による講義などを通じて、開発途上国の現状を学んでいる。

そして次のステップが、授業の計画づくりだ。「ゲームを使えば楽しみながら学んでもらえるのでは?」「クメール語にも興味があるんじゃない?」。留学

生とも相談しながら意見を出し合う。「準備期間にも、たくさん学びがあります」と武縄先生は話す。

「なぜ日本の子どもは働かないの?」
そう留学生に質問され、誰も答えられないことがあった。小さいころから家族のために働くというカンボジアの現実を知らなかったからだ。日本の常識が世界では違う。発見の日々だ。

小学校で授業をした池田実樹さんは、「人に説明するのが苦手なので正直不安でした。でもやり終えた時には達成感がありました」と振り返る。途上国の現状や文化の違いを知ることはもちろん、それを誰かに伝え、教える力が自然と身に付いている。

カンボジアの
ためにできること

出前授業をきっかけに、カンボジアのために何かしたい!という声が大寺小学校の子どもたちから上がった。そこで、日本語学校の授業に使ってもらおうと、50音表やすごろくなどを作

ることに。岡山学芸館高校の生徒たちが、毎年の研修旅行の時に現地に届けている。
「最初は喜んでもらえるか不安でしたが、小さな女の子が日本語で、ありがとう、と言ってくれた。ありがとうがあんなに素敵な言葉に思えたのは初めてです」。横山百々代さんはそう振り返る。「カンボジアの人々との触れ合いを通じて、国や言語が違ってても理解し合えると学びました」と野田京花さん

は話す。
帰国後、小学校で報告会を行うと、「私が作ったすごろくを使ってきてくれる!」「あの表を教室に張ってくれたんだね」と、子どもたちから歓声が上がった。「誰かの役に立てたと実感できると、小学校の先生たちからも好評です」と武縄先生は喜ぶ。
高校生と小学生が共に学び、行動する。岡山から世界を思いやる心がはぐくまれている。



[上] 研修旅行で留学生の出身校の授業を見学

[下] 小学生が作ったすごろくで遊ぶカンボジアの子どもたち

